

なり。

以上これを要するに甲背の棘の凡ての成蟹に發達するは最前區の6棘を除きて下の如し。

( I )	前區	二縱列の3對	.....3
( II )	後區	二縱列の3對	.....3
( III )	側區	各側に三縱列	.....9
			15棘

○甲背には最前區の6棘を除き左右各半分に15棘を必ず有し、何れも中央線に平行して配列せらる。

## V. 結 論

南樺太産のタラバガニの棘數は甲縁の各側に14, 額部眼窩部—最前區に5, 甲背の各側に15(成蟹の50%以上に存在する小棘4を加算すれば19)なるを normal form とし、其の配列は第二圖の如し。

本種は北太平洋の寒海に産し、北米沿岸にては Arctic Arask より南は加奈太の Queen Charlotte Islands 即ち N. 50° 邊迄分布し、亞細亞沿岸にては Bearing Sea, Kamchatka, Sea of Ochotsk, 日本海に棲息し、N. 36° 邊迄擴まり其分布區域廣し。而して本種の移動力は水産試験場の調査によれば(同場事業報告、第六卷、29頁、1929) 其の水平洄游は僅に3—79哩に過ぎず。されば各地に於て地方的の變化なきを保せず。余は南樺太全體の normal form を求めたるも本島に於ても西海岸、亞庭灣及重海岸産を別々に精査すれば各地に地方的變化を認め得るにあらざるか、將來の研究に待つべし。

## 魚 類 の 研 究 資 料 (6)

田 中 茂 穂

東京帝國大學理學部動物學教室

### XXX. 琉球の魚

近頃増田繁雄氏の示された標品は次の通り(各種一個)。

1. *Chaetodon lineolatus* CUVIER & VALENCIENNES GÜNTHER の Fische der Südsee, pl. XXXIV, fig. A (1874) にある本種の畫は聊か其の色線の方向を誤つて居るかと思ふ。FOWLER の Fishes of Oceania, pl. XXVI, B (1928) は其色線などがよく此標品に一致する。

2. *Zebrasoma veliferum*(BLOCH)

3. *Siganus vulpinus*(SCHLEGEL)

Syn. *Lo unimaculatus* EVERMANN & SEALE(a variety with a large blackish spot on the side of body)

私が見た標品は *unimaculatus* の型に属するもので、増田氏は是れと同様のものを他に数個見たが、*vulpinus* の typical のものを見なかつたと、この *unimaculatus* は FOWLER (前記の書にて、p. 285)の言ふ如く、私も本種の variety であらうと思つて居る。

### XXXI. 川タナゴの方言

九州(大分縣中津及同縣豊川村下拜田)では *Acheilognathus* 屬をフナ又はニガフナと云ひ、*Carassius carassius* をマフナと云ふ。鮒を特にマフナと云つたり、川タナゴをフナと云ふ處は九州以外には殆ど無いかと思ふ。

### XXXII. 鱒山國川を溯るか

大分縣中津の生れの今泉勝治氏の言ふ處では同氏が山國川の上流耶馬溪の念佛橋附近に奉職せられて居た時、その川で鱒が稀に取れる噂を聞いたが、實物を見たことは無い。然るに中津町ではその海岸で鱒の取れたことを聞いたことがないと。

此資料は私には相當貴いものである。山國川上流念佛橋の上流(山國川は流域十三里で、此橋は川口から十里位の處であると)で、稀に鱒が取れると云ふことはこれが海から溯つた鱒であるのか、それともエノハ(ヤマメのこと、九州一般の方言)の大きくなつたものか、標品を見なければわからないが、鱒が溯つたものとしても敢て差支ない。何となれば瀬戸内海では相當西の方まで鱒が海から川を溯るし、日本海沿岸ならば多分島根縣の西部まで鱒は溯るであらう。餘程以前のことであるが、私が熊本へ行つた節に、その土地を流れる川か又は池へ初めて鱒のやうなものが這入つて來たが、それは何であらうかと尋ねられたことがあるが、これも標品を見なかつたから、斷言は出來ないが、鱒が稀に是等の土地へ迷ひ込むことは考へ得られることである。高知縣下を流るる川の上流にヤマメの二型があつて其内の一つが鱒の幼魚に似て居ると云ふことは(十二月號本資料 XXIII 參照) 土佐灣に鱒が稀に迷ひ込んで、更にこれに注ぐ川を溯るとも考へられないでもない。斯様なことは極めて稀ではあるが、子孫に其特徴を遺すとも考へられよう。更に山間だけに居るヤマメでも元來が鱒であるから reversion でも又は variation range からでも鱒の形を取るものが現はれるとも言はれよう。

ただ稀に迷ひ込んでくる鱈は僅に一尾位であらう。然りとせばこれは雄か又は雌か、其點が全くわかつて居ないが、何れであつてもよからうと思ふが、寧ろ雌の場合が多くはなからうか。

### XXXIII. 山口縣萩の川タナゴ

山口縣萩中學の田中市郎氏の報告では萩にはヤリタナゴは居るがゼニタナゴは無い。またヤリタナゴ(斑紋、色線のなきもの)は居るがタナゴ(斑紋、色線のあるもの)はないと。

これは分布上面白いことで、ゼニタナゴは北日本のものである(南日本へも多少入り込んで居る)から、萩が川魚から見て南日本か北日本かを決するのに参考となる。*Acheilognathus* (*Paracheilognathus* を含めて) は色々の型はあるが日本のものは凡て同一種のものと思つて居る。ただ、中には著しい特徴を持つた型がある。タナゴとヤリタナゴとは其著しい例の一つで、其分布は頗面白く、兩者混同して住んで居る處と、其内の何れか一種のみ住んで居る處とある。

### XXXIV. *Arius* 屬と覺しき魚

田中市郎氏の報告によれば山口縣萩沖にて取れた一尺二寸許りのハゲギギ一尾を漁夫より貰ひ受けたる友人あり、尾は深く二叉に分れりと、

これはゴンズイと誤つたものとは思へない。ギギ類は淡水産のものであるし、頗る弱いものであるから、海の中で取れることはなからう。またギギ類で日本で取れるものに一尺以上のものは先づない。これは海産の *Arius* 屬のものであらう。若し然りとせばこの海産の *Arius* 類が日本海で取れたであらうか。一體日本海の魚は時々意外の分布をして居ることがあるから、強ち否定は出来ないが、寧ろ私は次の様に考へた方が隱當かと思ふ。即ち、此標品は下關のトロオル船が支那東海方面で取つたもので、これが萩へ輸送せられたのを日本海で取れたものと早合點したではなからうか、何れにしても田中氏が體長一尺二寸と明記せられてあるので、ハゲギギではないことが伺はれる。尙從來ハゲギギと云つた方をギギ、從來ギギと云つた方をギバチと改名して居ます。それは前種は琵琶湖の名稱、後種は東京の名稱である。

### XXXV. 二種のドンコ

田中市郎氏の通信「當地(山口縣萩)にはドンコ二種之あり候、一は普通のものにて、一は泥水の時々通ふ田の側の小川等の石垣の穴などに棲む、灰色に黒斑點あり、體頗肥大して、下顎上顎より少しく長きものに候、方言にてドベド

ンカチと申候、ドンカチはドンコのこと」

標品を見ないからわからないが、上記の二種と稱するは同一種のもので、*Mogurnda obscura* (TEMMINCK & SCHLEGEL) であらうかと思ふ。それとも二種を指して居るか全くわからない。

### XXXVI. 一種のベラ

これも田中市郎氏の通信。「山口縣萩にノメリコと云ふ一種のベラがある。キュウセンとは違ひ、普通に三寸餘りのものにて、浅海の海岸にて、素人の普通に釣るものにて、ニシキベラ又はセトベラの如く思はれ、北隆館發行動物圖鑑には食用とならずとあれど、それは通常此魚は、漁夫の手によりて漁獲され市場に出さぬため食用とするものなしとの意ならば宜しく候が、素人の磯にて釣る雑魚の内にては美味（焼きて食ふが常に候）にて、キュウセンと異ならず、只大なるものが居らぬのが物足らぬ丈に候。」

ノメリコと云ふのはキュウセンでは無いやうであるが、恐らく、セトベラ、ニシキベラなど小形のベラの總稱かと思ふ。また、此類は「食用とならず」と私が圖鑑に載せたのは田中氏の言はるる通り、市場に出ること頗少ないためであるが、これが相當美味であることは初めて承はつた次第である。

### XXXVII. カジカ

これも田中市郎氏の通信「ミヤマゴリの方言の魚(山口縣萩)は實物を調査致し候處、カジカに候、然るに動物圖鑑の記事に長さ普通 30mm 大なるものありては 50mm と有之候、當地のものは三四寸にて美味に候、當地附近には鰈の名稱を呼べば兩棲類のカジカと思ひ、魚にかかる名のものありやと驚く位に候」

カジカには二種あるが、報告者はその何れであるか明記してない。體長が大きいから、カマキリ (*Cottus kazika*) の方であらうか。北海道産の *Cottus nozawae* は少々大きい、これは *Cottus pollux* と同種かまたはこれの一型であらう。

### XXVIII. イワシの食物

これも田中市郎氏の報告「海産の鰯其他がプランクトン中硅藻を多食し居り候が、魚の眼に硅藻の如き顯微鏡的のものが見えるものにや」

鰯類の如きものは性微弱のもの故、自己よりも強いものは食ふを得ず、従つて小動物や植物を食ふことが多い。硅藻は顯微鏡的のものであるが、水中では澤山に集つて居つて、吾々の肉眼でも其集團を見ることが出来る。また或は香臭等も伴つて居るかも知れないから、鰯類が之を食ふのは怪しくない。ま

た、特に硅藻を好まなくとも、斯る水中に遊泳した時には受働的に其胃中に硅藻の充満することもある。故岸上博士のイワシ調査報告(明治四十一年発行)にはイワシの食物として、硅藻類、鞭毛類、有孔類、放射類、チンチンノデア類、撓脚類等を擧げてある。

### XXXIX. 濱名湖の魚類と漁法

次に擧ぐるは大學院學生池田雄一郎氏の報告である。同氏は静岡縣濱名郡入出村出身である。濱名湖は外海に通じた割合に大きい湖水であるから、此種の湖水としては我國では代表的のもので、普通の内灣や沿海とは大に趣を異にした處が見られる。例へば下に述べてある報告でもわかるが、冬期は著しく水溫が低下すると、割合に沿海が暖いために、多くの魚は移動をする事等である。

目下連載中の田中先生の「魚の研究資料」を拜見して郷里濱名湖西に於ける魚類の方言と漁方を少し傳へ致します。

#### 1. *Mugil cephalus* LINNE ボラ

20—50mm キララ(mica の如く光るためか);

100mm 内外 オボコ; 150—200mm イナ;

300mm 内外 ニサイ; 此以上 ボラ

8月頃は中丈(chû-daki)と云ふのは網の丈のあまり高くない、随つて水深の浅い處に集まるニサイ、ボラを捕へる網、又其漁法の事である。其を使ふには魚群を此網で圍み、其外側の水面上に10cm程隔てて長さ2m位、直徑2cm位の女竹を縫付けた簀網を浮かせる。次に漁師は舷をたたいて魚を驚かす。驚いて逃げ出さうとする魚は取圍まれた網に遮られてゐるため遂に水上へ躍出して網の hurdle を越さうとする。がその外側には簀網が跳出した魚の落ちるのを待つてゐると云ふ譯。10月上旬に「角目」(カクメ)と云ふ漁が始まる。その principle は前述の如くで唯水深の深い處の漁である。

2. *Liza menada* TANAKA 「イセゴヒ」と云ふ。秋冬の獲物である。

3. *Sparus macrocephalus* BASILEWSKY 「クロダイ」。此の仔は9月初めに100mm内外に達したのを「ピンタ」200mm位を「ハゴ」と云ふ。「クロダイ」は3年目位のもの也。水底が粘土質の處へ群集するさうでその漁場にクロダイ地と云ふのがあつた。

4. *Sparus aries* (TEMMINCK & SCHLEGEL) が略同時に同長或は其以上に達して美味である。之を「コギタイ」と云ふ。

5. 「キチヌ」を「マナジ」其の仔を「白ハゴ」と云ふ。

6. *Acanthogobius flavimanus* (TEMMINCK & SCHLEGEL) を「フユハゼ」、「フユタ」と云ふ。夏は瘦せて不味であるが冬期は gonad 發達して頗る美味

となる。體色黄がかつてゐる。

7. *Glossogobius brunneus* (TEMMINCK & SCHLEGEL) を「カメハゼ」又「ナツハゼ」と云ふ。夏美味である。體肥大し、色黒味がかつてゐて colour response 速かである。gonad は夏熟してゐる。
8. *Rhinogobius virgatulus* (JORDAN & SNYDER)「ブシ」と云ふ。但し6の仔と混同されてゐる。
9. *Anguilla japonica* TEMMINCK & SCHLEGELの漁法の一つに「ツボ」と云ふのがある。長さ40cm、太さ3, 4cmの竹の節をぬいた筒(ツボ)を40—50cm隔に竝べてその各の中央を縄で結付けた物を岸から10m位の水底へ沈下放置して「ウナギ」の入るを待つ。時日を経て其一端から漸次靜に繰上げて「ツボ」の一端を掌で押へながら垂直に立てると中の水は洩れ、若し中にウナギが居れば掌への感觸によつて素速く舟中の籠に入れるのである。

尙濱名湖は3月下旬太平洋から種々の魚族が湖内へ移入して来る。此時「サヨリ」が其魁をする。漁業も湖口に於ける此等の捕獲から始まつて(之を「ミヨ」漁と云ふ。蓋し水脈(ミオ)によつて網を張るから)夏季其盛を極めエビ、ウナギ、等を夜間曳網でとり11月頃湖水の溫度が魚族の移出にまで低下する迄は續く。けれども12月頃1月頃に「マハゼ」や Crustacea の「ガザミ」等は獲られる。生物群の位置と水溫とは密接な關係があり漁に老巧な(單なる經驗のみで)とは水溫によつて生物群の移動地點を明察することである。勿論方數里の狭い舞臺ではあるが。従つて horizontally に或は vertically に數 metresの差が甲乙所得に grave consequence を齎らす。salt の percentage には temporal な變遷があるらしく約40年程前 Echinodermの生じた事があるさうだが此の20年來そんな事を聞かない。又注入河等の關係から local にも差異があり冬期湖面の氷結する part と然らざる part とある。それから夏冬に於ける level の差は70cm位であらう。

## XL. 岐阜附近の川魚

次は岐阜縣安八郡南杭瀬村岐阜第二工業學校波磨實太郎氏よりの通信である  
メダカの方言は岐阜縣及び其の以西ではウキス、コンバイ、ハコバイス、コメンジヨ、コメンジヤ、メダカ、コメジヤコと申候、私は阿波徳島市の者に候が、徳島市ではメエチン、メエタと申し居候。岐阜以西ではホトケドジヨオをホトケサン、ナベワリ(之を鍋に入れて煮る時は鍋が破れると申し居り候)、カマツカをネギ、カナクジ、カンナクジ、スナクジ、ドオゼン、スナクジラ、イシホリ、カンナ、カンナクス、シコツボ、カマツカ、オオボサン、スナクジリ(武儀郡上保村)、ダギンボ(武儀郡洞戸村)と稱し居候、括弧なくして、單に方

言のみ挙げあるは多くは西濃方面の方言に候。

### XLI. ソロイヒゲ

和歌山縣水産試験場木下虎一郎氏は次の通信と共に一標品を送り越さる。

昭和五年十月二十三日湯淺町打瀬網にて漁獲のエソの胃中より獲し一尾に候が、何と申すものに候や。

標品を見るに *Coelorhynchus parallelus* (GÜNTHER) なり。ヒゲ類 (Macrouridae) は稍タラに近きものにて、稍深海に産し、邦産にてても二十餘種あり、その内最多きは三四種なるが、爰に挙ぐるものは普通種の一つである。尙、送品者は單にエソと云はるるも、胃中にありし標品より推察すれば大エソなりしなるべく、即ち *Saurida argyrophanes* (RICHARDSON) であつたかと察せられる。尙、此標品が相當に完全な處から見ると、胃中に呑み込んで居たとしても、打瀬網に取られて後に、苦んで居る内に不知不識の間に外から口中に滑り込んだものとも思はれる。尤も此の大形のマエソは食肉性であるのは無論である。

### XLII. 甚兵衛鮫の滑川町に於ける一報告

本資料(4)XII(本誌第四十二卷第五百五號、昭和五年十一月號、四百三十七頁)に於て富山縣滑川町市島宇八郎氏の第一回報告が見當らないと書いてあつたが、其報告を見出したから爰に報告する。

昭和二年八月十五日午後二時に富山縣滑川町高月井黒彌右衛門氏經營の角網に體重三百七八十貫の大鮫捕獲さる、價格は百三十五圓で香具師に引き取られ、當時富山市で見せ物となつた。尙、市島氏の送られた寫眞を見ても正しく甚兵衛鮫である。

尙、當時同地の新聞の記載には「丈が二丈六尺、胴の廻りが二丈、口の廻りが一丈五尺、重量五百貫」とあるが、市島氏の報告とは聊か相違がある。

### XLIII. 諏訪湖の魚類

諏訪中學牛山傳造氏の報告は次の通り。

次に挙げるは田中阿歌磨先生著湖沼學上より見たる諏訪湖の研究下卷 993—998 頁を参考し、小生幼時より見たるもの、只今見居るものを報告致し候、和名は諏訪湖にて呼稱するもの(括弧内は標準和名田中記)。

1. サスリ、サソリ(アカザ)從來より少數殊に河川にて捕へらる。現今は尙稀少となる。
2. ナマズ(ナマズ) 川でも湖中でも捕獲され相當漁獲あり。現在も左様。
3. ドジョオ(ドジョオ)川、水田、湖中、現今も多獲され、食用に供せらる。

4. シマドジョオ、ゴマドジョオ(シマドジョオ)比較的清らかな川にて採集され、殊に六斗川に多し。
5. コイ(コイ)
6. フナ(フナ)

上記兩種は川、沼、湖中普通相當多獲される。

7. ムロ、モロ(モロコ)小生幼少の頃は普通のもの相當多獲したものなれども、現今其數を減ず。
8. カマヅカ(カマツカ)七月頃、川(比較的清らかな川底、砂礫よりなる川)にて捕獲する。明治初年には湖の砂岸でも捕獲されたる由なれど、只今左様の湖岸なければ多くは川へ溯上し居るものを捕ふる。近年少數になる(此項頗興味あると思はれる——田中記)。
9. ハヤ、雄の美麗になるものをアカズ(信州でハヤと云ふのはオイカワ、カワムツ、ウグイの三種であるが、各種に更に別名がある。爰に云ふハヤはオイカワのことである——田中記)湖中、河川普通のもの、昔より減少したるも、それでも普通のもの。
10. アカウオ(ウグイ)五月乃至八月頃まで川へ溯上すると捕獲したものですけれど、近年甚しく減少する。小生幼少の頃は川を溯上する群を遙か遠方より見られ一投網に多い時は百尾位捕れたるを見たることあり、その場合驚きて川岸に跳び出るものを見たる有様なりし(何故にウグイが著しく減少したか、色々の原因があらうと思はれる——田中記)
11. ウナギ(ウナギ)河川湖中に普通殊に今日にては幼魚を放養する故漁獲は相當ある有様、ウナギも分布區域あるべし無制限に溯上せず。
12. アメノウオ(ヤマメの大形のもの)七八月頃川に溯上するを湖に注入する處にて捕獲するが、普通従來とて多きものにあらず、現今稀少となる。
13. アブラムロ、アブラモロ(アブラハヤならん)小生幼少の頃、河川に多少居たるもの、現今は殆ど漁獲出來ざる有様となる。
14. ヨナ(ヨシノボリ)湖岸近く、七八月より川に溯上し、河川に住む、これは年により甚だ差ある魚屬にて、明治三十年代は甚だしき繁殖を見たるも、その後甚しく減少、大正に入り再び繁殖を見たるも、現今甚だ稀少となる。面白い生活史を見せて呉れ申し候。
15. メダカ(メダカ)湖の瀕岸、水田、沼、水田の間を流れる溝に居るもの。此外放養したるもの。
  1. (ヒガイ) 大正二年琵琶湖よりして放養するもの、あまり繁殖せず。
  2. (ワカサギ) 大正三年霞ヶ浦より放養、翌年は大形のもの捕獲されたるも、その後は多數繁殖したるも小形のものとなる、而して年により漁獲

高に差あり、大形のもの漁獲される翌年は、漁獲少さが如き様感ぜらる、正確に統計したるに非ざるも、どうも左様思はれ申し候。

3. (スナヤツメ) 六斗川中流四賀村、飯島地籍にて採集されたるものを見る。何かの放養魚に混じて来たものかと存じます(此魚は頗る少いやうではあるが、元來其土地にあつたものではなからうか、信州でも他地方では生存して居るやうである——田中記)。
4. (ゼニタナゴ) 霞ヶ浦よりカラスガヒを移した時、その中に産み置かれたものより発見し、現今甚しく繁殖漁家困難す(是れは先年、牛山氏に面會した時にも話されて居たことで、當時同氏の中學で數個の標品を實見したことである——田中記)。

鮎に就いて。明治時代時によりて稀に採集されたるもの、六斗川の水は湖の西岸より流れて天龍川に入りたるもの、これは明治四十四五年頃諏訪中學水泳部遠泳即ち上諏訪湖岸より對岸なる花岡即ち天龍川口に達するものの爲め空瓶を流して調査したるものなり、この水流によつて六斗川に溯上したるものが捕獲される事あり、その時の標品當地水産組合標品中にあり、その後大正に入りては湖水の水は益々濁りたる故にや、アユ捕獲されたるを聞き申さず候、近年琵琶湖のヨアユを六斗川上流に放流致し居り相當捕獲出来る由。

諏訪湖と云ふ一つの自然界にも平衡は常に行はれる事と存ぜられ候、平穩の諏訪湖自然界に何等か平衡の破らるべき事あらばその時諏訪湖と云ふ環境により前とは多少狀況の異なる平衡が成立することと存ぜられ候、霞ヶ浦よりカラスガヒを、琵琶湖よりイケチヨオガヒを入れたる結果は從來より生活したりしドブガヒは甚しくその種屬衰へ、或は絶滅したるやも計られず、結局是等貝の漁獲高には差を見ざる現状、殊にゼニタナゴの大繁殖により、他の優良魚族の減少を招來せずやなど考へ居候。今迄はいつでも取れるやうに思つたドブガヒも尊きものとなるべく、諏訪中學には僅に數個を藏するのみに候。(斯様なことは處々で聞く所です、移植を研究又は指導して居る人は大に考慮すべきものと思ふ——田中記)。

#### XLIV. ウグイに就いて

東京でハヤ(ホンバヤ又はウグイとも云ふ)と云ふものとマルタと云ふものとは同種か別種かと云ふことは人々によつて議論せられて居る。私は同一種のものであると思ふし、この事を昭和五年十一月十七日と十八日との東京朝日新聞に出して置いたが、これに就いては多くの釣師からは異議があると思ふ。私の考ではハヤとマルタとは全然同一ではない、然し變種と見る程のものでないと思ふ。例へばハヤとウグイとは人間で言へば親子とか、兄弟と云ふよりは違つ

て居るかも知れないが、さりとて北日本の人と南日本の人との相違も無いかと思ふ。まづ都の人と田舎の人位の違ひではなからうかと思ふ。

東京附近に居られる岡本柳外氏からは次の通信があつた。

小生に池田と申す釣の畏友あり、次に同君の釣日記抜萃を掲げる。

秋季殊に氾濫時に於て六郷も下流の大鳥居附近にてハゼ等に混じてかなり多くのウグイ(?)——二三寸、附近ではマルタツ子と申す——が釣れるが不味、同じ頃多摩川も上流の丸子、二子或はその上方にて獲れる同大の物は美味である。

利根川も高崎附近の馬川沿岸など——この附近ではクキと申す——で一寸に満たぬ稚魚を多く見受けるが、又信濃川沿岸にても——アカウオと申す——上流の屋川の支流裾花川の沿岸に於ても同様のものを見る。海から又はそのずつと下流からマルタ及マルタ類似のウグイがその附近まで上つて産卵するとは考へられぬ、稚魚が十里、二十里の川を上つて来たとは尙變である、當然川の中流以上に棲むウグイの子であらうと思はれる。従つてウグイからはウグイが、マルタからはマルタが生ずると云ふ可能性が多く、生活状態の異なるに従つて變化し殆ど別種の如く成つたのではなからうか、分類學上からマスとヤマメとは同一種かも知れぬが、専門家以外の人には大概マスとヤマメとは區別してゐる。原は同種でも現在ではあらゆる點で異つてゐる變種であると同様にマルタの變種がウグイか、ウグイの變種がマルタであると云ふべきか(圈點を附けた處が大切な處で、此論法でいくから、多くの釣師ばかりでなく、多くの専門學者も誤に陥る。尤も此の圈點を打つた記事の中にも正しい觀察が含まれて居るが、論法は一寸疑はれる。同一種の生物に存する個體變化や地方的變化と云ふことを深く考慮しなくてはならぬ。また、私達と地方の當業者との間に斯様な點で意見の一致を缺いて、困ることがある——田中記)。

信州のアカウオ即ちウグイを羽田の海に投じたらこれがマルタになるだらうかと疑はれる(此の項は實驗が不可能であるから、何とも斷言は出来ないが、マルタか又は原形のウグイに近いものになると考へられる——田中記)。

マルタが海から河に上つて産卵し、孵化した一部分が海に下つてマルタとなり、他の部分が川に残つてウグイとなるのか、マルタの子はマルタで、ウグイの子はウグイであるのか、ウグイの子からマルタが生ずるものであるか(これも實驗が不可能であるから、單に他の類似現象から推定するのである。さて斯様に推定するとして、今日では遺傳學も進歩して居るから、案外、この答へは複雑することと思はれる——田中記)。

水量の豊富な例へば最上川の如き中流でも相當に大きなウグイ——この地方にてハエと申す——が居る。肉味及骨の工合はウグイでマルタではない。成魚の大小は水量によるのではないか(是れも一原因である——田中記)。

三月頃から五六寸のウグイの内婚姻色が極めて濃厚な色彩の鮮麗なものが多く釣れる。ウグイの成魚か(ウグイと云ふ型の成魚であらう——田中記)。

富士川流域——芝川附近——でウグイは一尺以上のものが夏でも釣れる、味は不味、これに似てハヤは八寸以下で美味、

金澤附近ではウグイは七八寸以上、小さいのは居らぬ。美味、それに似て小さいものをハヤと云ひ不味、

ハヤとは何か事實ウグイの味の如く色々違ふのか(金澤や芝川で云ふハヤと稱するはウグイを指して居るか然らざるか、今少々區別點を示されるか又は標品を見ないと不明である——田中記)。

東京在住の毛利基尙氏からは次の通信に接した。

私の郷里は上州烏川の上流三ノ倉人口二千位の所です、高崎より乗合自動車にて約一時間半位の所です、此郷里にてウグイの事をハヨ或はクキ又はガラツバヨと稱して一番多量に又一番面白い魚釣の得物とされて居ります。

此ハヨ或はクキは此地にてはメダカより稍大きく成つて、二寸乃至三寸位までをハヨと稱し、ハヨに淡赤い腹線が出来ると、これをクキと呼んで、産卵期には大川の流に下向きなマヤと稱する小石で橢圓形の産卵場を作つて、この中へ産卵にくるクキを網にて捕獲するのです。

勿論最近は斯うしたことは嚴禁されて居りますが、疊半丈位の大きさの中で上手に行くと三四寸五寸位のクキを百尾位獲へる事は容易です。

又ガラツバヨとは産卵期に入ると、とても美しい色彩を帯びるのを斯く呼んで居ます(産卵期の美しい雄を指す——田中記)。

## 七面鳥の畸形卵、家鶏の畸形輸卵管 各一例に就いて

千 島 喜 久 男

埼玉縣熊谷農學校

昨年から種々な家禽の normal な卵や、輸卵管を實驗材料として集めてをる中、七面鳥(*Meleagris gallopavo* L.)の一畸形卵及び家鶏(*Gallus domesticus* BRISS)の左右共に發達した oviduct に遭遇したが未だ報告されてをらない様に思はれるから、ここに記載する事にしたい。

### (A) 七面鳥の畸形卵一例

ここに述べようとする畸形卵は、埼玉縣實業補習學校教員養成所生徒田沼兵司君が、自宅(埼玉縣大里郡)に飼育中の bronz turkey の雜種(年齢二歳)が、1930